

こうほう ショッキング

Vol.91

Kōhō shocking



いとせ かずみ
糸 瀬 加寿美さん

●プロフィール

54歳。厳原町国分生まれ。3人姉妹の長女に生まれる。中学卒業後、福岡第一商業高等学校（現在の第一薬科大学附属高等学校）に進学。高校時代を福岡で過ごしたのち帰郷し、厳原町商工会に就職。30代前半での母の死を経て、父の経営する建築業を手伝うことに。徐々に家づくりの楽しさを感じはじめ、建築施工管理技士の資格を取得。知人の手料理の美味しさに感動し、手作りのものを使った店を持ちたいという思いを抱くように。対馬市創業等支援事業補助金を受け、国分の旧有明荘に「ふれあいかふえ紬」を昨年オープン。父との2人暮らし。

○ご実家のお仕事である建設業に携わることになった時は？

父も現役でしたし、初めは手伝いをする程度でのスタートでした。でも家を建てる方との打ち合わせや、設計段階から関われることにだんだんと面白味が増えてきて。講習に通って資格を取得し、大工仕事以外は全部できるようになりました。「家を建てる」って、喜びがいつぱい詰まった仕事です。一つ一つ提案し、作り上げ、施主に喜ばれ、私も喜びをいただけます。人の家であっても、自分の思いをたくさん詰め込んだ家を建てているので、思い入れもたくさんです。完成して鍵をお渡しする時、嬉しい反面、寂しくなります。一から関わった初めての家は、もう築20年近くなりますが、今もお邪魔することがあります。すると、拝見するたびに家の表情が変わっているのに気づきまします。材質も変化し、家がますます持ち手のものになっていくんです。

○食に興味を持ったのは？

高校卒業の記念にもらった梅の苗木が成長し、大きな実をつけてくれるのを梅干しにしたりしていました。知人の作る梅の甘露煮が美味しくて、頼み込

んで作り方を習ったんです。その頃から食への楽しさが生まれたいように思います。柚子胡椒やいちごジャムを作ってお裾分けして、差し上げた方に喜ばれる嬉しさに「いつかこんな手作りのものを使ってカフェのような店がしたい」と、心のどこかで思っていました。

○夢を形にするチャンスはいつ来るか分からないですね。

店をするなら昔の家の良さを生かせるこの場所で、って思っていたんです。お借りできるタイムングやチャンスは逃すと、こういうチャンスはもうないんじゃないかと思って、開業に向けて動き始めた時には少ない資金で奔走しました。内装材を焼いたり塗ったり、大工さんに教えてもらいながらDIY女子しました。たくさんの方の助けをいただきました。こうしてオープンできたのも皆さんのおかげです。

○この店の目指すものは？

私が子どもの頃は、エスカレーターのあるストアや、いも天や鯨の竜田揚げが並ぶ十王小路を通って、丸栄へと、母と店を渡り歩くのが楽しみでした。最近、そんな楽しみがないように思っています。駐車場もないこの場所

で店をオープンさせたのは、皆さんに町歩きをしてほしいという思いから。普段感じないものも、歩いていたら感じることもできる。そして疲れたら、一服できる場所として立ち寄ってもらいたい。町のコミュニティーの場所になれたらと思うんです。

○お店の名前「紬」に込める思いは？

在住の人も、旅行者も、韓国人も、隔てなく交流できる場所。人と人との縁、場所と場所の縁をつむぐ場所になってほしいんです。少しずつでもその思いがここを訪れる人の間で生まれ、形になる場所になってほしい、それが見れるのも喜びなんです。この店は、自分の夢を形にするというよりは、人と人との思いを形にする場所であってほしい。店であって生きもののような。まだ自分でも試行錯誤ですが、皆さんと一つずつ進化させていければいいなと思っています。

毎回、登場してくださいました方に次の方をご紹介いただくこのコーナー。今回は美津島町雑知にお住まいの松村勝利さんです。お楽しみに。